て滿語研究が長崎唐通事に命ぜられた文化五年から、三度目に同じ事業に從事した嘉永三年の前々年迄に亙る頃はこの人の活動時代であつたことは疑ない。此頃の長崎唐通事には、明末亡命の客の系に出るものが多いのであるから、滿語研究の如きことを好まないのは、獨り綺石先生ばかりではなかつたらしく、これがこの事業の進捗を見なかつた重なる理由の一つであつたであらうことはほゞ疑ない。今墓碑の文中これに關する部分を摘錄して置く。

明治九年丙子之歲十二月廿九日、地理寮御用掛蔡君以病卒于官。假葬東京四谷理性寺。享年三十八。有一男、名進一。尚幼。既葬。從祖母猪股氏、歸執喪於家。明年丁丑秋八月、藏衣髮于先塋之次、以爲改葬之地、立石表之。君爲人明直、不苟合。是以歷仕大學・開拓・工部・內務、皆不得顯仕。君亦不欲也。君諱隆忠、通稱愼吾、號翠萍。其先明人。九世之祖蔡三官君、寬永中避亂、來家長崎。八世至綺石先生、始補譯司。嚴毅耿介、所爲不顧利害。幕府嘗令譯司兼學滿洲語。先生獨辭不能曰、祖先之所以遠違墳墓而來寓者、特惡左衽也。爲之子孫者、寧身伏于俎、安忍口稱侏離乎。先生君之父也。

碑は三重の臺石の上に立ち、表に「蔡愼吾先生之墓」と題し、向つて左の面から裏、右の順にこゝに引く文が鐫られ、所引以下には愼吾の陳春豫に就きて唐音を修得したこと、英佛の語を究め、英國留學の志を懷いて果さなかつたこと、滿清は明の深仇であるから其の語を學ぶことは父祖の意と背馳するものであるが、英・佛は我と儼然同盟の國であり、殊に愼吾はその兵學地理を專攻しようとしたもので、徒らに鴃舌を操らうとするのではないから、その心は父祖と一であることなどが記されて居る。耿介綺石先生の如くでないまでも、大概の唐通事が滿語を學ぶことを好まなかつた有樣はこれによつても推知される。